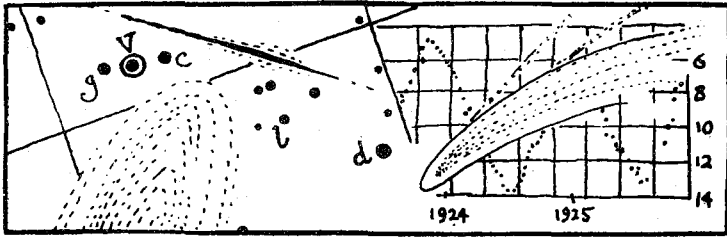


Title	東亞天文協會觀測部月報 (皇太子御降誕奉祝)
Author(s)	
Citation	天界 = The heavens (1933), 14(153): 104-110
Issue Date	1933-12-25
URL	http://hdl.handle.net/2433/165463
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher



東亞天文協會觀測部月報

流星課通信

小 槇 孝 二 郎

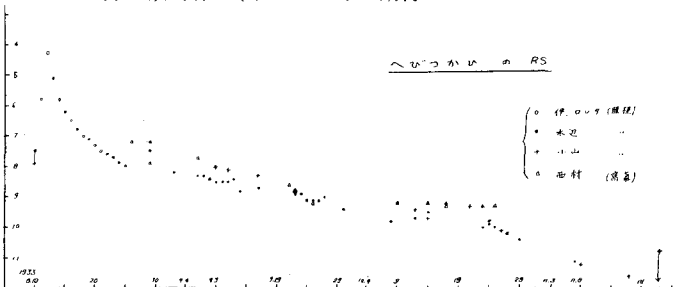
獅子座流星群の觀測は會員の熱心な御努力により、又大毎の援助を得て實におびたい観測を集めることが出来た。其中には實に今迄にない貴重な記録が可成り含まれて居り、整理の結果は大いに期待してよいものと信ぜられる。それらの報告は天界二月號以後に掲載される筈であるから、たゞ今は觀測者諸兄の御健闘を感謝することのみに筆をとめて置く事とする。

去年八月以來の流星觀測の報告は私の一身上の多忙から完了することを得ず、この一月號にも掲載することが出来なかつたが、この多忙も来る三月には一先づ打ち切る筈であるから四月よりは御期待に添ふ様努力する心算である。随つて十一月の獅子座流星群の整理の大部分は花山天文臺の龜井、藤井兩氏に御願ひすることにした。この點も悪しからず御許し願ひます。[1933.12.6]

變光星觀測報告 (10)

小 山 秋 雄

昭和四年、天界第九、十卷に九回にわたつて會員の觀測結果を發表したが、以後中絶してゐた。今回復活する事になつたから、會員諸君は觀測結果をどしどし送つて欲しい。尙觀測希望者には星圖その他で極力便宜をはかる。數年前に比し望遠鏡も普及されたから、有力な觀測者の輩出されん事を期待してゐる。



へびつかひのRSの眼視, 寫眞觀測

木邊成磨 滋賀縣中里村 眼視, 3 種屈折(16×), 10種反射(36×)

月 日 時	目 測	光 度	備 考
1933年			
8 25 21	V4以上 g	7.4?	} 大きい比較星適當に見付らず
26 21	V4以上 g	7.4?	
27 21	V4以上 g	7.4?	
29 21	V 3 g	7.5	
9 2 21	g 3 V 4 s	8.2	s 星の光度は補正以下10種反射
6 21	g 3 V 3 s	8.3	
7 21	g 3 V 3 s	8.3	
8 21	g 3 V 1 s	8.4	
9 21	g 4 V 0 s	8.5	
10 21	g 4 V 0 s	8.5	
11 21	g 4 V 0 s	8.5	
12 21	g 4 V 1 s	8.4	
13 21	s 2 V 4 t	8.8	
16 21	s 1 V 5 t	8.7	
22 21	s 3 V 2 t	8.9	
23 20	s 4 V 3 t	8.9	
24 20	s 3 V 2 t	9.1	
25 20	s 4 V 1 t	9.1	
26 20	s 4 V 1 t	9.1	
27 20	s 4 V 2 t	9.0	
30 20	t 2 V 2 u	9.4	
10 8 19	u 2 V 1 v	9.8	
12 19	t 3 } u 0 }	V 2 v	9.7
14 19	t 2 V 3 v	9.5	
23 19	v 2 V 3 w	10.0	
24 19	v 0 V 4 w	9.9	
25 19	v 2 V 4 w	10.0	
27 19	v 4 V 2 w	10.2	
29 19	v 5 V 0 w	10.4	
11 6 19	y 3: V	11.1:	α 見えず

小山秋雄 花山天文臺 眼視, 18種屈折(73×)

月 日 時	目 測	光 度	備 考
1933年			
9 9 19	g 1.5 V6以上 t	8.0	赤 し

9	11 19	g 2 V4以上 t	8.1	困 難 赤みらすらぐ
	16 19	g 3 V 4 r	8.3	
	22 19	r 1 V t	8.8	
10	12 19	t 4 V 1.5 u	9.4	雲
	14 19	u 2 V 1 v	9.7	
	21 19	t 1 V	9.3:	
	24 19	u 2 V 0 v	9.8	
11	26 19	v 3 V 2 w	10.1	雲, 月 低 空 ク ク, 薄雲
	8 19	z 2 V 3 α	11.2	
	16 18	α 0.5 V 2 β	11.6	
	21 18	y > V	<10.8	

西村繁次郎 花山天文臺 寫眞, 4 種テツサ 1 玉 F 4.5, 8 種エルマヂ 1 玉 F 4.5.

月 日 時	露出時間	乾板上の目測	寫眞光度	備 考	
1933年	分				
8	26 22	15	b 2 V 3 m	7.2	テツサ 1
	29 20	8	b 3.5 V 2 m	7.2	ク 木邊成磨撮影
	29 20	15	m 3 V 1 g	7.9	ク
9	6 20	30	m 4 V 5 g	7.7	ク
	21 20	30	u 2 V 1 v	8.6	ク
	22 21	30	u 3 V 4 t	8.8	ク
10	25 21	30	t 1.5 V 4 w	9.2	ク
	9 19	30	t 2 V 3 w	9.2	ク
	14 19	30	t 3 V 4 w	9.2	ク
	17 20	30.5	t 3 V 2 w	9.3	エルマヂ 1 } 宮本正太郎撮
	17 20	30.5	t 2 V 3 w	9.2	テツサ 1 } 影
	23 20	30	t 3: V	9.3:	エルマヂ 1 乾板の端
	25 19	30	t 4 V 4 w	9.3	テツサ 1

比較星の符號は花山天文臺作成の青寫眞星圖上の符號で、その眼視、寫眞光度は別表の通り。

小山氏の光度が木邊氏に比して著しく明るいの、H_α輝帯により變星が赤い爲、口径の大きい程明るく眼に感ずる結果である。

	眼視光度	寫眞光度		眼視光度	寫眞光度
b	6.9	(7.1)	v	9.8	8.6
g	7.9	8.1	w	10.4	9.5
m	8.3	(7.3)	y	10.8	10.3
r	8.8	—	z	10.9	10.2
s	9.0	—	α	11.6	10.5
t	9.2	9.1	β	11.9	10.6
u	9.5	8.5			

(1933.12.2)

遊星面課報告

幹 事 木 邊

先づ新課員の紹介

鹿野 熊治郎氏	兵庫縣阪急沿線岡本	15cm反射經緯儀
松本 義一氏	廣島縣尾道市久保町	16cm反射經緯儀
中野 繁氏	大分縣中津市一ツ松町	10cm反射經緯儀

まだまだ課員が足りない。相當な望遠鏡の所有者の加入を期待する。

最近、送付を受けた「スケッチ」は下の通り

		宮本	木邊	杏掛	中野	伊達
金 星	—	—	—	—	2	3
木 星	7	1	1	3	—	—
土 星	—	—	1	1	—	—

觀測結果 金星。觀測には**好都合**の状態にあるが、殆んど模様のない星なので、スケッチは事實上一致して居ない。兎角判然たる模様はないのだらう。然し充分氣は付けて貰いたい。それで一個の試案として下記のような方法で今後行つて見れば、何かまとまつた結果が得られて、最も困る(此の星特有の)錯覺による模様の存在の誤りを正し得るかと思ふ。即ち太陽黑點及流星の觀測法に従つて天候、氣流の状態の許す限り連續して見る。例せば

金星 10cm反射, 180×, 100× 姓名

月 日	天 候	シーイング	模 様	濃 度	参 考
5 2	8	7	無	—	ム 1 ングラズ 100×
3	6	7	無	—	
4	cloud	—	—	—	
5	5	4	?	1?	
6	10	8	有	2	
					180× スケッチ

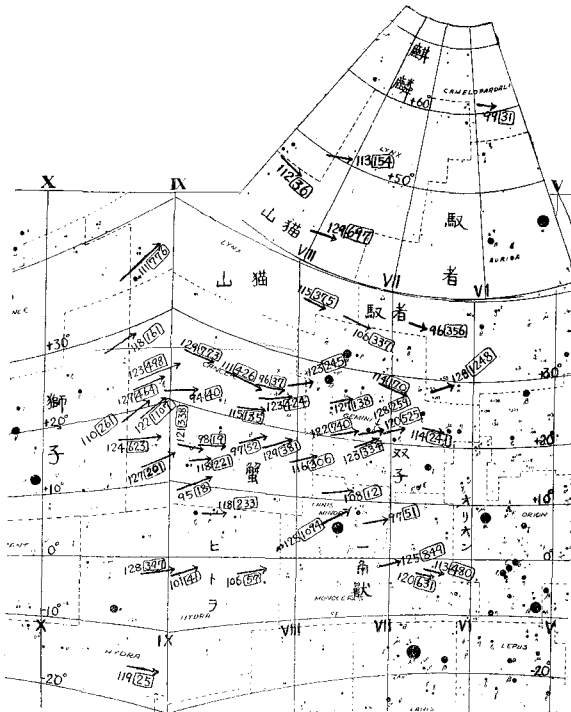
この様に毎日見て行く。然しシーイング5以下では事實上觀測の價値はないだらうが——。模様は疑はしいものは、?。淡いが、先づ、確かと思ふものは、有として、濃度は無理な話ではあるが、最も濃い所を標準にして5-1まで記入する。5は木星の帯位(北温帯の黒いもの)、土星の帯(多少の變化は有るが)位を3として見たら如何かと思ふ。事實上2以上の明瞭な黒模様は見えないだらう……。そして参考の所にム1ングラズの使用は記入して、スケッチは「模様は有る」と云ふ程度なれば必ず行ひ、?の程度では、行つた方が**好都合**ではあるが、任意とする。試案として以上の方法で行つて見たい。錯覺による誤認は、有る程度まで除かれて、少し経つた結果が出るかと思ふ。締切は便宜上25日までを一ヶ月として、29日までに到着する様にして頂きたい。行く々々、會合附近を除いて、太陽の様に、一日も欠けない様に見て行き度い。

木星 宮本氏が、よいスケッチを得て居る。この星は 20cm 以上の人は、微細な點を見て頂き、10cm 級の人は微細點をやめて木星の面上に占める帯の廣さ、市、それから木星全體を10階位に分つて各帯の濃さに點数を附したスケッチをして欲しい。又白斑は却つて小口径の方が見るのに都合がよいから、此等の點をも 10cm 級の目當てにして頂きたい。7—8cm 級でも出来る仕事である。(最黒帯を1位で、中央赤道部の明るい帯が先づ、8點位に見て居る。)今年の帯の状態は1898年のものに酷似して、丁度、週期の整数倍になつて居る點が注目すべきであらう。猶ほ、例の大赤點は、宮本氏の觀測では見事であり、特にその西邊は、前期より随分變化して居る。少しも目を離されない。(スケッチに於ては白斑は赤で入れる事)

土星 もう淋れてしまつて例の白斑も駄目である。先づ來期を待つて觀測されたい。

附記 來月位から優秀なスケッチがあれば紹介を兼ねて寫眞にして發表する心積で居ます。又行く行くは分離せねばならないが、月面課も今月より遊星面課に合せて行きます。觀測の方は御知らせ下さい。將來は獨立は勿論の事、遊星面課でも、内遊星と木星と火星と土星位には分ける事になるであらう。

寫
眞
課



太陽課 黑點相對數報告 (1933年十一月)

觀測者(觀測地)	松本(臺灣臺中高女)	淺野(山口縣長府町)	山田(山口縣小郡町)	改發(神戸市須磨區)	荏部(神戸市灘區)	伊達(兵庫縣雲雀丘)	北村(大阪市外布施)	佐々木(京都市福知山)	大橋(京都市中京區)	西村(京都市左京區)	龜井(花山天文臺)	木邊(滋賀縣中里村)	三澤(長野縣上諏訪)	沓掛(長野縣青木村)	清水(靜岡縣島田町)	水谷(東京市本郷區)	稻垣(東京市芝區)	山根(東京市澁谷區)	石坂(新潟市旭町)	千葉(岩手縣水澤町)	下保(札幌市豐平町)
鏡徑耗	50	70	75	150	75	36	70	100	90	60	55	73	73	102	100	38	75	44	38	50	58
倍率	40	60	48	68	77	55	62	64	94	90	64	60	85	75	73	50	30	43	65	50	44
1	13	14	24	15	14	15	22	曇	欠	欠	14	欠	14	14	雨	12	14	0	14	14	
2	0	12	12	曇	0	12	0	曇	曇	欠	0	0	0	0	0	0	0	0	0	曇	11
3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
5	0	0	曇	0	0	0	欠	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	曇	0
6	曇	0	0	雨	雨	雨	0	曇	曇	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	雨	0
7	曇	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	曇	0
8	曇	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	曇	0
9	0	0	0	0	0	0	曇	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
11	旅	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	曇	0
12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	曇	0
13	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	曇	0
14	0	0	0	0	0	曇	曇	0	曇	曇	0	0	0	0	0	0	0	0	0	欠	0
15	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	雨	0
16	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	雨	0
17	曇	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	雨	0
18	0	0	曇	0	0	曇	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	雨	0
19	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
20	曇	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
21	曇	欠	欠	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
22	曇	欠	欠	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
23	0	0	0	曇	0	0	曇	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	曇	0
24	欠	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
25	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
26	曇	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
27	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
28	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
29	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
30	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
平均	1	1	1	1	1	2	1	0	0	1	1	1	1	1	1	0	1	2	0	1	1
日數	21	23	26	23	25	23	18	8	20	21	17	25	24	25	16	22	17	14	12	25	

彗 星 課 報 告

1933 f (Whipple) 彗星 米國ハーバード天文臺オリヅツ出張所主任の Whipple 氏は去る10月21日牡牛星座に一つの彗星を發見した。其位置は、

$$1933 \text{ Oct } 21, 2^{\text{h}}57^{\text{m}}1 \text{ U.T.}, \alpha \ 3^{\text{h}}23^{\text{m}}, \delta \ +9^{\circ}22' \quad (1933.0)$$

である、後になつて、10月15日の乾板上にも像が認められた。彗星の光度は、當時13等であつた。(Kwasan Bulletin No. 266, 花山急報 61號), 花山天文臺では、10月23日此彗星を最初に撮影してより、現在まで、絶えず追跡して居る。寫眞乾板上の像は一見恒星の如く、僅かに其周圍に Nebulosity が認められる。(花山急報, 63號, 64號, 66號, 68號 Kwasan Bulletin 266) 故中村要氏製作の 16cm F.3 寫眞鏡は此の彗星の撮影に關し、其強力なる集光力を遺憾なく發揮した。同時に同氏製作にかゝる 11cm Triplet lens も一時間半の曝寫に於いて、13等半の彗星の像を示す事が知られた(但、これは、像が淡いので測定するには、困難である)。

此の彗星の軌道要素は發見以來諸所に於いて發表されたが (Kwasan Bulletin No. 266, 花山急報, 63號, 66號) 現在最も確かと思はれるものを次に掲げる。

$T = 1933 \text{ Aug. } 2.5858 \text{ U.T.}$	$a = 3.826692$ 單位
$\omega = 190^{\circ} 55' 46''$	$q = 2.501941$ "
$\Omega = 188 \ 36 \ 16$	$e = 0.346187$
$i = 10 \ 13 \ 51$	$P = 7.48575 \text{ 年}$

此の要素は、10月15日、22日、31日の觀測より、Whipple と Cunningham 兩氏が計算したものである。(Circular No. 461). 此れによれば、彗星は既に近日點を通過し、太陽より段々遠ざかつて行く。又地球と彗星との距離も、益々遠くなる。従つて、彗星の光度も、減少する一方である。Whipple 氏の豫報によると、12月18日には14等になる。日々運動は、12月中旬迄西南の方向に進み、12月末其進路を北東に轉ずる。現在の位置(12月12日)は赤經 $2^{\text{h}}54^{\text{m}}5$ 赤緯 $5^{\circ}2'$ 附近である。

尙、花山天文臺の11月16日及び22日の觀測と、上記の軌道要素に基く豫報位置との差は、

$16^{\text{d}}523$	$\Delta\alpha = -0^{\text{m}}1$	$\Delta\delta = 0'$
$22^{\text{d}}509$	$-0^{\text{m}}1$	$-1'$

である。

Neujmin 星 Circular, No. 461號によると、Neujmin 氏は去る11月17日次の位置に、一つの天體を發見した。

$$1933 \text{ Nov. } 17, 23^{\text{h}}18^{\text{m}}8 \text{ U.T.}, \alpha \ 2^{\text{h}}53^{\text{m}}6 \ \delta \ +23^{\circ}15' \quad (1933.0)$$

日々運動は、 $\Delta\alpha = 0^{\text{m}}0$, $\Delta\delta = -30'$ である。光度は12等半。此れは多分短かい流星が乾板に寫つたのだと云ふ説もあつたが、Circular No. 462 や 463 によると、11月21日にも Neujmin 氏によつて觀測されて居る。此の天體に關して、其後の News により、1933WC といふ小遊星として取り扱はれることになつた。(12月20日 柴田)